

# 戦後日本はどのように原子炉を受け入れたか

龍澤 武

広島・長崎を経験した日本は戦後なぜ、またどのように、原子炉を受け入れたのか、そこに出版はどのように関与したのか、私が考えてみたいのはこの問題です。

まず「原子炉」という日本語についてです。この言葉は、**nuclear reactor**の日本語訳ですが、この翻訳は正しいのでしょうか？**nuclear reactor**は「核反応装置」「核分裂反応装置」ではないのでしょうか。私が考えてみたいのは、なぜ「核反応装置」ではなく「原子炉」だったのか、「反応装置」ではなく「炉」だったのか、という点です<sup>1</sup>。「原子炉」という言葉は、韓国語でもまったく同じ言葉（**wonja-ro**）で**nuclear reactor**を表すものとして使われます。原子炉は戦後の言葉ですが、そこに日本の植民地主義が刻印されているのはいうまでもありません。

「炉」とは「囲炉裏」の炉、「炉端」の「炉」、「暖炉」の炉です。そこでは暖かい火が燃えている。その回りには人々の穏やかな暮らしがある。そうしたモノとしての炉、人間の生活経験と深く結びついた場所としての「炉」です。製鉄の溶鉱炉あるいは高炉 **blast furnace** といった近代の工業化社会を象徴するようなモノも、原理的には、そこで火があかあかと燃えているという点で、人々の経験的なイマジネーションのなかに存在するものでした。鉄や金属を溶かして加工するための小規模な「炉」は前近代の伝統技術のなかにあるものでしたし、近代でも全国に存在していた。それらは火をとり扱う神聖な場所でもありました。ちなみに中国語では「核反応堆」で、「堆」は粘土のブロックを積み上げた被いのような建造物を表します。**nuclear reactor** の旧称である、**pile** がこれに近いでしょう。つまり中国語ではきわめてニュートラルで即物的な表現となっています。

<sup>1</sup> O.E.D.の記載を参照すると日本語の原子炉にあたるいい方 **atomic furnace** は、口語では使われた可能性があります。

“1950 Amer. Speech XXV. 24 The surprising thing about pile and reactor is that only a few alternatives have ever been used for them: nuclear furnace, atomic furnace, atomic-energy machine.”

「囲炉裏」という言葉はどうでしょうか。これは14世紀の『慕婦絵詞』（**Bokiekotoba**）という絵巻のなかの「囲炉裏」です。『常民生活絵引』からの写真ですが、『絵引』の解説は、「炉」を囲む小さな空間全体を「囲炉裏」としています。「イロリ」という言葉は、民俗語彙で、もともと **oral** な日本語です。この **oral** な日本語には「炉」という言葉は、実は含まれていません。柳田国男は「木綿以前のこと」で、「キロリ」という言葉を「キル（居る）」という動詞から出た語で、もとはすわる意の「キル」と座席の意の「キ」が合わさった「キルキ」ではないかと推定しています。柳田の **folk etymology** はしばしばあてにならないと言われますが、この推定は当たっていると思います。地方によって「イルリ」「ユルリ」「ヨロリ」などともいいます。「イロリ」「イルリ」「ユルリ」の三つは、16世紀の『日葡辞書』（**NittpoJisyo**）にも出て来ます。この「キロリ」という民俗語彙に「囲炉裏」すなわち「炉」を囲む人々の居場所、という意味の漢字を当てたのは日本語の天才的な機知といえるかもしれません。そしてこの宛字の漢語表記が、徳川時代以降次第に定着していき、それとともに、「イロリ」という言葉が共通語となっていくといわれます。今日は触れることはできませんが、他の状況証拠に照らしても、敗戦直後の日本人の大多数が「炉」という言葉からまず連想したのは「懐かしい日本」の「囲炉裏」「炉端」という言葉であり、人々の暮らしと結びついてきた小さな「炉」だったと、私は断言できるように思います。しかし原子「炉」はこれとはまったく異なります。それは「炉」ではないからです。私が考えてみたいのは、「炉」とは似ても似つかぬ巨大な核反応装置を、だれがいつ「炉」と名付けたのかという問題です。この、どのような意味でも人間の経験世界とは無縁の、反人間的でももちろん反自然的な怪物的な装置を戦後の大多数の日本人が抵抗感なく受け入れていったという問題に、それは深く関わると私は考えています。

1945年の敗戦から50年代の前半まで、私はこの時期が、日本における「原子力利用」のその後

のあり方を決定した重要な時期と考えます。大まかな流れを年表にしてみます。この時期のほぼ最後にあたる1954年3月に、中曽根康弘がアメリカの原子力政策の転換を機敏にとらえ、原子炉建造予算を国家予算に組み込むことに成功し、55年に原子力基本法が制定され、これと並行してなされた、戦前の警察官僚、読売新聞社主、悪名高い正力松太郎（初代原子力委員会委員長）による原子力平和利用の大キャンペーンによって「原子力平和利用」の国策が日本社会に浸透していったとする見方は、この人物たちの悪名についてはまったく異論の余地がないにしても、この通説は一面的といわなければなりません。また一部には平和憲法と同様、アメリカの核戦略を「押しつけられた」という見方がありますが、これも不正確です。

これは岩波書店の雑誌『世界』の1954年の4月号に掲載された、田中慎次郎さんの「平和のための原子炉」という「原子炉」を礼賛する論文です。『世界』はご存知のように、戦後一貫して、批判的、良心的左派・リベラル派の立場を維持してきた、代表的な言論雑誌です。とりわけ戦後の50年代・60年代には、世論形成に非常に大きな影響力を持つ雑誌でした。田中慎次郎さん 朝日新聞の記者で、戦中に、同僚だった尾崎秀実のゾルゲ事件に連座して逮捕され退社しますが、敗戦後、直ちに復帰し、リベラル左派の代表的なジャーナリストとして活躍。戦後まもない時期から、平和利用に関する多くの本を翻訳し、また自ら文章を執筆しています。彼は1956年に発足する原子力委員会の参与となります。

これは、敗戦直後から「原子力の平和利用」を積極的に説いてきた物理学者武谷三男が、52年11月、『世界』と並んでリベラル左派の人々に強い影響力を持った雑誌『改造』に発表した「日本原子力研究の方向」という論文です。武谷はここで、原子炉という言葉を用いて、「動力的利用の見通しが次第についてきた」、「日本人こそ平和的研究を行う権利を最ももつ」とし、その条件として「平和、民主、公開」の三原則を提示します。この三原則は原子力利用を国策とする際に大きな意味を持つこととなります。武谷は、湯川秀樹の後輩の素粒子論を専門とする優れた理論物理学者で、戦前の1937年に、反ファシズムの文化雑誌『土曜

日』『世界文化』に参加して、治安維持法で二度検挙されています。敗戦後、日本共産党の強い影響下に結成された民主科学者協会で指導的な役割を担い、鶴見俊輔さんなどの『思想の科学』研究会にも参加し、マルクス主義の立場に立つ先鋭な科学思想家として思想界に大きな影響を与えたコミュニストです。もちろん武谷だけではありません。1952年4月の「講和条約」発効以前から、物理学者や自然科学ジャーナリストたちが積極的に「原子炉」を紹介し、核の平和利用の実現性について、きわめて肯定的に論じてきました<sup>2</sup>。

1945年9月に、GHQ/SCAPよって原子力研究の禁止令が出され、原子爆弾投下記事の検閲が開始されます。さらにサイクロトロン破壊が、理論物理学者に大きな衝撃を与えますが、しかし他方、平和利用についての言論は敗戦直後からさかんに行われます。私は、「原子炉」という日本語が日本社会に定着していくのは1951年から52年にかけてではないかと推定しています。これは田中慎次郎が1950年1月に『世界』に掲載した文章ですが（この号に有名なH. ノーマンの「クリオの顔」が掲載されています）、「原子力を国際管理し平和的に利用する」という国際的な動きを、期待をこめて紹介した文章です。そこで用いられているのは「原子核反応パイル」という言葉でした。1951年5月刊の岩波現代叢書『わたしはかく信じる』という本に「原子炉」が一箇所出て来ます。これはアメリカ初代原子力委員長リリエンソールの回想の翻訳書です。しかし本格的な登場は、同年10月刊行の理論物理学者杉本朝雄（SUGIMOTO Tomoo）の『現代自然科学講座』（弘文堂刊）に執筆した論文です。「夏の強い日差しが窓からぱっと入り込んできた」という寺田寅彦風の文章から始まるこの論文が、「原子炉」が一般的なかたちで出てくる最初ではないかと思います。杉本は戦前に

<sup>2</sup> 吉岡斉『原子力の社会史』（朝日新聞出版、2011年新版）。吉岡は「この時代にとくに目立った動きを見せたのは物理学者だった」と指摘しています。3.11 福島原発事故を考えるうえで、たいへん重要な本が二冊あります。一つは、山本義隆『福島原発事故をめぐる』（みすず書房）、もう一冊は『新版原子力の社会史』です。私の発表は、この二冊の本によって与えられた俯瞰図のなかで、二人のすぐれた科学史家が十分に書き込んでいない、「戦後の日本人はどのように原発を受け入れたか」という問題の一端を出版の側から考えてみたいということに尽きます。

東京大学理学部を卒業し理化学研究所に所属した学者です。のちに原子力委員会の理事となります。『講座』というのは日本の出版の独自の形式で、その話をしていると時間がなくなりますので省略しますが、かなり多くの部数が出版されたと思います。次は、『自然』という雑誌に掲載されたローレンス・ハフスタッドという人物の「原子炉」です。この人物については「A.E.C.の原子炉製造部長」という紹介のみです。杉本の論文もこの翻訳論文も専門的というよりも初学者に向けられたむしろ啓蒙的な色彩の強い文章です。『自然』は中央公論社が戦後間もなく刊行開始し、レベルの高い科学啓蒙雑誌という定評を得ていきます。おそらくこの翻訳は、当時編集部員だった湯川秀樹の門下生の森一久（MORI Kazuhisa）の手になるものではないかと思います。森はのちに原子力産業会議の中心人物として、学会と電力産業界との重要なパイプ役を担います。

もう一つ決定的な本をあげてみます。1951年11月に岩波書店が刊行した長田新（OSADA Arata）編の『原爆の子』です。原爆を経験した広島の子どもの作文集で、17カ国語に翻訳されていますから、ご存知の方も多いと思います。子どもたちの凄惨な経験の手記を集めたもので、非常な反響を呼びました。GHQの検閲をかいくぐって出版されたという点でも有名な本ですが、いま注目したいのは自らも被爆した教育学者長田新の序文です。長田はこう記しています。「原子エネルギーは、一方では人類を破滅に導くほどの恐るべき破壊力を持っているが、それを平和産業に応用すれば…動力源とすれば驚くべき力を発揮し得る」「人類文化の一段と飛躍的な発展をもたらすことは疑う余地がない」「偉大な善をもたらす」道としての原子力の平和的利用に向かって、人類は前進しなくてはならない」と。さらにこう記します、「世界中の誰も体験しなかった人類史上最大の悲劇と惨禍とを身をもって体験した広島の子どもの少年少女たちこそ、このことを全世界に訴える十分の権利と義務とを持っている」と。この文章には原子炉ということばは使われていませんが、長田の序文と、子どもたちの作文のなかに「平和の産業のために使ってください」という言葉が出てくることに、森一久や学術会議を主導した大阪大学の物理学者伏見

康治（FUSHIMI Koji）は「原子力発電推進」の大きな力を得たと後に回想しています<sup>3</sup>。あたかもそれが広島の子どもの「悲願」であるかのよう

この『原爆の子』を原作として、1952年新藤兼人監督『原爆の子』、53年関川秀雄監督『ひろしま』の二つの映画が製作され、いずれも大きな反響を巻き起こします。映画と相乗的に、この本が当時どれほどの人々（もちろん子どももふくめ）に読まれたのか数量的に確定することは無理ですが、しかしそれはたいへんな数だったと思います。廃墟を遊びの場としていた子どもたちは全国にいたからです。ヒロシマの子どもの「悲願」は全国の子どもたちにもごく自然に受け入れられていったのです。孫歌さんの重要な概念、「感情記憶」を使わせていただくと、「原子炉」＝「原子力の平和利用」は、子どもたちの戦争経験・戦後経験の「感情記憶」をものの見事に組織化していったと言えると思います。

1952年・53年の年表をご覧ください。この時期になると、「原子炉」は完全に定着します。小さな年表では紹介仕切れません。私があげるのはほんの一例にすぎません。これは1952年2月1日の読売新聞の科学欄ですが、ノルウェーで動力用の実験炉が完成したというニュースに武谷がコメントしています。「原子力は昨年から今年にかけて重要な一時期をかくした。それは一方では原子力の平和利用実用化の見通しがついたことであり、また他方では大国以外の国で原子炉が着々成功しつつあることである。実際、原子炉は最近相当低廉につくることができるようになった」「おそらく十年以内に原子動力は重要な経済要素となるであろう」と。日本の理論物理学者たちが核というものを「科学的真理」の探究のターゲットとしつつ、その利用・実用への強い思い入れを持っていったことがわかります。

1952年4月のサンフランシスコ講和条約の発効、原子力研究の解禁を受けて、日本学術会議で原子力の利用に関する重要な議論がなされます。有名な議論です。茅誠司と伏見康治の「原子力委員会

<sup>3</sup> 伏見康治『時代の証言』（同文書院、1991年）。森一久「原爆体験と日本の原子力開発」（『日本原子力学会誌』No9、1995年）。

設置を政府に働きかける」という提案に、現状の政府主導で原子力利用に進めば必ず「対米従属の軍事利用になる」という反対意見が優勢を占めるという議論でした。反対した人々のなかでも物理学者の多くは原子炉建設の必要性については一致していたと言われます。しかし皮肉なことに事態はすでに物理学の研究領域から離れていたと、吉岡斉さんは次のように指摘しています。「日本で実験物理学が再スタートしたこの時期、理論物理学の世界的フロンティアはすでに素粒子研究に移っていて、核分裂は工学研究の分野とみなされていた」と<sup>4</sup>。理論物理学者の「空想」から、原子炉・原発という巨大装置の製造開発、高度な産業化と密接な関係を持つ、つまり細分化された工学的専門技術者と、彼らを組織的に使う国家と大資本の大規模な管理マネジメントの手に移行していたということです<sup>5</sup>。しかもこの1952年時点では実験原子炉は世界に33基が運転ないし建設中という報告はあっても、実際に「平和利用」の実用に使

<sup>4</sup> 吉岡前掲書。

<sup>5</sup> 日本語の「科学技術」ということばについて。「科学技術」という一つ続きの日本語が公式に使われるようになるのは、1941年6月、日米開戦の半年前、「高度国防国家建設」のために第二次近衛内閣で閣議決定された《科学技術新体制確立要綱》においてです。この言葉は戦後も引き継がれ（科学技術行政協議会、科学技術庁）科学者・技術者はもちろん一般的にも、科学と技術は一体のものと受け取られるようになります。多くの科学者たちは「科学技術」が劣ったために戦争に負けた、と考えていたのです。日本の帝国主義戦争・アジア侵略に「科学」がいかに貢献したかという反省はきわめて希薄だった。それは、「科学技術」の振興には〈民主化〉が不可欠、さらに〈民主主義国〉では「科学技術」に大きな国家予算を投じている、という戦後意識に無反省に連続していくものでした。科学技術は莫大な国家予算を当然使うべきもの、使えなければ科学技術の進歩はないという思考と直結していたのです。こうした思考が、工学系技術者のみならず科学者たち多数の当たり前の前提となっていたということが、学術会議での議論の背景にあります。〈対米従属の軍事利用になる〉と考えた民科の若い研究者たちが、学術会議で、「科学技術一体派」というべき（もちろんなかに平和主義者もいましたが）「老練な」推進派学者たちをいったんは食い止めながら、その後の中曽根予算の段階では、それを打ち破れなかった大きな理由の一つと思われます。〈科学の体制化〉、〈科学の体制的構造〉という基本問題が内在的に本格的に問われるのは、60年代以降の広重徹氏の仕事（『科学の社会史』）からです。彼もまた湯川秀樹研究室で理論物理学を研究し、民科の活動に参加します。その後科学史に転じますが、惜しいことに1973年、47歳の若さで亡くなりました。

われているものは一基も存在していなかったのです。1954年の実用目的の原子炉建造予算成立時点でも、日本にはそれに対応する工学的技術の蓄積も準備もまったく存在しなかった。“controlled release”という、世界で最初に核分裂反応を持続的に起こす実験に成功したシカゴ大学構内のシカゴパイルの記念碑に出てくる有名な言葉がありますが、日本の物理学者たちは、controlled releaseを信じ、巨大化する工学的技術に内在する危険性についてどのような留保も懷疑も持たずに、原子力の平和利用を説いていたのです<sup>6</sup>。理論物理学者として当時国際的にも名声が高く、「科学者の社会的責任」をその後も真摯に説きつづけた名古屋大学の坂田昌一と彼を尊敬する民科の若い研究者たちも、「応用科学の政治的利用の危険性」は指摘しても、〈科学それ自体の体制化〉、〈科学の体制的構造〉について内在的な批判意識は持っていなかったと思われます。武谷や坂田や民科のマルクス主義の立場に立つ研究者たち（若い研究者の多くは共産党員かシンパでした）の欠陥は、スターリン主義体制のソ連を無条件に、絶対的な「平和勢力」と規定したことにあります。この当時の坂田昌一も、「民衆を基礎とする科学の発展こそ、人類社会への貢献」であるとして、とくに中国の共産主義と科学研究に揺るぎない信頼を寄せていたのです。そこからは原子力の平和利用についての懷疑は生まれるべくもなかったのです<sup>7</sup>。

日本の理論物理学者や良心的なジャーナリストは、コスト的にも技術的にもまったく無防備のまま、いいかえると現実感を持たないまま、この時期までに「原子力の平和利用」を幻想的・空想的・楽天的に説いていたのではないのでしょうか<sup>8</sup>。彼ら

<sup>6</sup> 大江健三郎「核時代への想像力」（『核時代の想像力』所収、1970年刊）がこの言葉を引用しています。現在、脱原発運動を呼びかけている大江健三郎さんもまた、他のほとんどすべての批判的知識人とともに、「核兵器廃絶」しかるのちに「原子力の平和利用」という「段階論」の枠組みのなかにとどまっていたと言わざるを得ません。<sup>7</sup>民科のこうした自己の「立場」の実体化・絶対化をさして、すでに1959年に、藤田省三さんは「民科の歴史」は「残念なことですが、マルクス主義の思想としての墮落の歴史」であると批判しています。久野・鶴見・藤田『戦後日本の思想』（中央公論社、1959年）。

<sup>8</sup> 1956年1月発足の原子力委員会に加わった湯川秀樹は1年後に委員を辞任します。1990年代の初めに取られた、当時まだ存命の関係者の談話記録の録音テープが残って

のその無防備さ、無批判さが、私には「核反応装置」ではなく原子「炉」という日本語に象徴されているように思えます。私があげた人々のうちの少数、たとえば武谷三男は、50年代半ばから60年代にかけて、原子力発電について慎重な姿勢に転じ、やがて批判派となっていくます。しかし、「時すでに遅し」といわなければなりません。そして、それにしても基本姿勢は長く「核爆弾の禁止」しかる後に「平和利用」という、いわば空想的「段階論」の枠組みのなかにあったのです。それは「核は平和的に利用し得る」、「平和的に利用すればそのエネルギーは人類に限りない未来をもたらす」という大前提に支えられているものであり、核の利用そのものの廃絶を志向するというものではありませんでした。

私は、岩波書店、改造社、中央公論社という三つの出版社の出版物をあげましたが、1950年代半ばというこの決定的な時期における日本の左派的でリベラル派の出版社は、私がやがて編集の仕事をするようになる平凡社もみすず書房もみなこの主張の枠のなかにありました。こう言っても良いでしょう、核の平和利用を積極的に主張する、そのことによって核の軍事利用に反対するという行き方を取ったと。

これは、1953年に出版された『百万人の原子学』（東洋経済新報社）という翻訳本です。原本は1947年にMcGraw-Hillから出版されたものです。啓蒙的な解説書ですが翻訳も非常に読みやすく訳者の高い能力がよく示されています。その訳者のひとり金関義則（KANAZEKI Yoshinori）さんを私は想い出します。彼は、複雑な経歴の持ち主でした。東北大理学部から海軍技術将校、戦後毎日新聞の科学部記者となりますが、旧軍関係者を排除するページにあって毎日を退社します。しかし彼は完全な左派で民科の中心的な活動家でもありま

した。彼は各新聞社の科学記者を集め原子力関係の勉強会を組織します。その後も博識の反体制のフリーランスの科学ジャーナリスト・編集者としてみすず書房や平凡社などの左派の自然科学系編集者にたいへん尊敬される存在でした。彼の回りには各社の優秀な科学編集者が集まっていたのです。

岩波書店でも平凡社でもみすず書房でも、武谷三男や金関義則さんといった民科や左派の学者・ジャーナリストばかりでなく、朝永振一郎・湯川秀樹・坂田昌一という人文的・哲学的教養をもち科学的真理を探究する、日本の叡智を象徴するかのような理論物理学者の影響を深く受けた、個人的にもこの人々に連なる、科学ジャーナリスト・編集者たちが、まさに良心的で啓蒙的な出版の場で「核の平和利用」の未来を熱心に説いていたのでした。

最後に戦後啓蒙期の最良の成果と評価された平凡社の『児童百科事典』全24巻の「原子力」という項目を紹介します。筆者は星野芳郎で武谷三男の影響を受けた科学技術史の専門家、民科の活発な活動家です。この巻は1956年に刊行されています。ここでも、原爆と平和利用が当然のこのように連続して解説されています。星野芳郎は「パイル（原子炉）」とし「かまど」というこれも古い日本語を使って説明しています。この写真は裏表2ページで挿入されているものですが、1ページ目には丸木位里・赤松俊子夫妻の「原爆の図」の部分が掲げられ（これは早い例でしょう）原爆の恐怖を伝える写真、2ページ目は原子力パイルや水爆実験の写真で構成しています。核爆弾と平和利用を併置する、いやむしろ対置することで、AではなくB、歴史家の加納実紀代さんの痛烈な武谷批判で用いた言葉でいえば、A「だからこそ」B、を強く印象づけています<sup>9</sup>。この児童百科事典は、リベラル左派とマルクス主義の立場に立つ、戦後

いますが、そこで伏見康治が通産省の当時の担当官僚に湯川秀樹のこの「辞任」の真相について尋ねています。学術会議側で平和利用推進に大きな役割を果たした伏見博士が、元通産官僚に当時の事情を質問するというのも驚くべきことですが、その答えはさらに驚くべきものでした。その通産官僚は「湯川先生は電力原子炉のことは「良いのか悪いのか私にはさっぱりわからない。心配ごとが多く、責任が重いのに何も知らないのだから」といわれていた」と証言しています（NHK『ETV8 原子力事故への道程』2011年9月18日放映）。

<sup>9</sup> 加納実紀代「ヒロシマとフクシマのあいだ」（『インパクション』2011年6月号）加納さんの武谷批判について一つだけ指摘しておきたいと思います。五歳のときに広島で被曝した加納さんの批判は非常に重いものです。私は賛成ですが、しかし大事な点で誤解があります。加納さんは先に私があげた1952年11月の武谷の『改造』の文章「日本人こそ」を批判しているわけですが、いま見てきたように武谷のこの文章は、まさにその1年前の『原爆の子』を踏まえてなされたものであると私は考えます。

## 72 戦後日本はどのように原子炉を受け入れたか

の知識人・研究者の総力を結集して編集された子どものための百科事典です。子どもばかりか、当時の小学校・中学校の、革新派の、意識的で熱心な教師たちがこの百科事典で教え方を学んだといわれます。先にあげた『原爆の子』も『児童百科』も 50 年代の半ばに小学生だった私にはこうした先生とともに強く印象に残る本でした。

山本義隆さんの『福島原発事故をめぐって』がふれていますが、朝日新聞の昨年 7 月 21 日の記事によると、核燃料サイクルを国際的に認められている日本は、すでに核兵器 1250 発分に相当するプルトニウム 10 トンをため込み、これは米露英仏に次いで世界第五番目、アジアではもちろんダントツに多いと言われます。さらに朝日新聞 9 月 21 日の記事では、日本の内閣府は、原子力委員会に日本が内外の工場で保有しているプルトニウムは 30 トンであると報告したといっています。もはや「核兵器廃絶のうえで原子力の「平和利用」へ」という、敗戦後の良心的で真摯な科学的真理の探究者であった理論物理学者たちの「幻想」に立ち戻ることはできません。核兵器も原発も人間が作りだしたまったく同質の悪といわなければなりません。戦後日本の私たちはすぐれた理論物理学者たちとともに、この二つの同一性を、原子「炉」という、曖昧で不正確な、しかし馴染みやすい日本語によって覆い隠し、幻想的に乗り越えようとしてきたと、痛恨の思いとともにそう言わざるを得ません。ご静聴を感謝します。

(りゅうさわ たけし・東アジア出版人会議理事)

### 龍澤 武

1945 年東京生まれ。1968 年平凡社入社。平凡社選書編集長、取締役事典書籍部長、取締役編集局長。平凡社では加藤周一編集長のもと、内部編集長として『世界大百科事典』(全 35 巻)を完成(1988)させるかたわら、西郷信綱、藤田省三、網野善彦など日本の精神史・歴史学を革新する著者の本の企画編集に従事した。平凡社退社後『季刊本とコンピュータ』編集委員、トヨタ財団理事などを歴任。現在、東アジア出版人会議理事、法政大学講師。